



古谷野潔（こやの・きよし）歯科医師 九州大学大学院歯学研究院教授、日本補綴歯科学会理事長（撮影／松永卓也）

インタビュー

日本補綴歯科学会理事長
歯を失ってもかめるように

クラウン（冠）やブリッジ、入れ歯（義歯）など、欠損した歯を補う方法のことを補綴（ほてつ）という。歯科医師ならだれでも手がける基本的な技術だが、日本補綴歯科学会では、専門医認定制度を設けている。その意義はどこにあるのか。2011年4月に同学会理事長に就任した古谷野潔歯科医師に聞いた。

——理事長を引き継いだばかりですが、学会をどのように運営していきたいか、まずは抱負をお聞かせください。

学会にはおもに二つの役割があります。臨床（*注1）や研究の新しい成果を持ち寄って意見交換をする学術大会を開くこと、そしてそれらの成果を伝える学会誌を発行することです。

これに加えて近年では、診療ガイドライン（*注2）の作成や専門医の認定なども担うようになりました。学会は会員外の歯科医師や患者さんなど外部に対して、情報発信や提言をする社会的役割も求められていると思うのです。もちろん、学会の原点である意見交換の場をより活

発化させていきたいと思いますが、外部に対しての情報発信や提言も積極的に実施していきたいと考えています。

——会員外の歯科医師に対して、具体的にはどんな情報発信をしていきたいと考えていますか。

全国に約10万人いる歯科医師のうち、補綴歯科学会の会員は約6500人です。歯科医師は医科と異なり大学に残る人が少なく、卒業後はほとんどが開業医になります。そのため、一般の歯科医師は学会活動から離れてしまいがちです。

しかし、だからといって会員だけで学会を運営しては、自己満足になってしまいます。そこで、実際の臨床で役立つ知識や技術を学べる場として学会を利用してもらえよう、一般の歯科医師向けのセミナーなども積極的に開催していく予定です。このような機会を通して、一般の歯科医師と学会との距離を縮めたいと思っています。

——もう一つ、外部に対する情報発信の柱に「専門医制度」があります。貴学会もホームページで補綴歯科専門医名簿を公開しています。ただ、「補綴」といえばクラウンやブリッジ、入れ歯など、歯科医ならだれでも手がける基本的な技術です。にもかかわらず専門医制度を設ける意味はどこにあるのでしょうか。

当学会の設立は1933年で、80年以上の歴史を持ちます。また、歯科学で「歯科補綴学」は「歯科保存学」「口腔外科学」と並ぶ、三つの大きな専門分野の一つとして確立しています。ただ、海外で

は補綴歯科専門医はスペシャリストとして認知されているものの、日本ではまだ十分に認められていません。

わが国でも、歯科医療は高度化・多様化しており、患者さんのニーズも多様化しています。一人の歯科医師ですべての治療をカバーするのはむずかしいケースも出てくるでしょう。そのような場合にお互いに得意分野を生かしながら、複数の歯科医師が連携して治療することを、今後、歯科でもやっていく必要があると思うのです。そうすれば、患者さんもいい治療が受けられ、失敗するリスクが少なくなるはずです。

そのために、ある一定のトレーニングを受けて、一定以上のレベルにあることを認定する——そこに、専門医制度の意義があると思います。

歯を失うまでに至る
プロセスに目を向けて

——一般の患者は、補綴歯科専門医をどのようにときに活用すればいいのでしょうか。

ブリッジや入れ歯にしたけれど、なかなかうまくかめない、しゃべりにくい、かみ合わせがしつくりこない、調整を繰り返すがうまくいかない……。そういったときに、補綴歯科専門医にセカンドオピニオンを求めるのいいと思います。

ただし、なんでも手がける一般の歯科医師がいいか、高度な技術をもった専門医にかかるべきか、一概にいうことはで

*注1 実際の患者を対象とした診療のこと。

*注2 特定の病気や治療法に関して診断基準や実施の手順などをまとめた指針のこと。全国どこでも一定の標準化された医療が受けられるようにする目的で作成される。